慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	独逸都市研究序論
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.3 (1928. 3) ,p.293(1)- 324(32)
JaLC DOI	10.14991/001.19280301-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280301-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

御卒業の記念寫眞は
親切で
上手で
廉價な
中鉢へ御用命願ひます
麻布區飯倉通
芝公園赤羽橋側
中鉢寫眞館
電話青山六七七六

各病院眼科
諸醫大御用
慶應義塾大學
病院眼科御指定
正確ナル眼鏡
清野眼鏡店
東京市四谷區麹町十三丁目
電話四谷四五四三番

三田學會雜誌　第二十二卷　第三號

獨逸都市研究序論

奥井復太郎

（一）

一般歴史に於いても或ひは個々の國に就いても都市組織が何時發生したかと云ふ事を年代記的正確を以つて定める事は至難である、今假りに都市の經濟的性質と政治的性質に就いてのみ見る、政治的關係に於いては各國の政治的都市現象は其の發展に必ずしも常に同似とは云へないが經濟的關係に至つては殆ど全體に亙つての同一現象を見る事が出來る、即ち都市は工業の分立、商業の發達を基礎として發生したと云ふに恐らく何人も異存はあるまい。此の點を目して都市の

經濟的標識とする事が出來る。又斯くして發生した都市内部に於いてこの工業又は商業に從事する所謂市民なる特殊身分的存在には、其の發生の初期にあつては殊に一般農民的存在から別離された特殊的存在として、全體的に特殊な法制的政治的屬性の賦與せらるゝが當然である。此の所謂市民團體が法制的政治的に「市民」なる特別身分を構成しうるを以つて都市の政治的標識となすをうる。故に全歴史に就いて都市の發生を都市其のものゝ經濟的標識又は政治的標識に從つて定めうる、工業の分立商業の發展（後段說くが如く市場の發生）は經濟的標識に從つた都市發生の起源とする事をうると共に市民的特殊的法制上の身分の形成を以つて政治的標識に基く都市發生の起源とする事が出來る。此の意味に解すれば都市の存在は常に經濟的條件の前提を必要とする、政治的法制的に市民なる存在は既に純農業的經濟から職業的に分化解放された商工業的存在である事を必要とする。此の事は又流通經濟組織と云ふ事に關係させて考へられねばならぬ。前述の工業の分立、商業の發達とは一家族經濟内に於いて分勞が行はれると云ふ意味ではない、故に大家族經濟又は莊園經濟内部は如何に多くの工業技術的分化を有するもその經濟的組織は依然一個の Eigenwirtschaft たるに留まりこゝに云ふ工業の分立ではない、勿論かゝる技術的分化は各經濟の生産力增加に重要な役目を演じ從つて流通經濟組織を發生せしむ可き有力な動因となつた事は改めて說くまでもない。がこゝに所謂市民とは商工業に從事して交易經濟組織に出入する各個獨立な經濟單位でなければならぬ。但し此の公共的な市場の制度並びに其の市場が定時的或ひは常久的に開かれると云ふ事は勿論經濟的發展の可なり後段に於いてゞある。貨幣經濟の成立は之れと關係を持つてゐるが交易制度から見れば市場は、嚴密に云へば經濟的目的による交換は、制限的間歇的に行はれて漸次自由な永續的狀態に入つたのである、この最後の發展の階程に於いて現はれる者が完全なる市民（商工業者）であるがこの發生は明らかに莊園内部の手工業技術者又は自己經濟の管理者（例へば莊園經濟の管理者として自經濟の所産又は必要を外部に供給又は購求するが如き役目）の存在に遲れるものである。工業技術の分化、原始的交換、工業の分立、組織的商業の發生が其の過程である、この最後の二過程を經て經濟的標識に從ふ都市は完全に成立する、而してこの成立に伴つて法

制、政治的に市民なるものゝ特殊型も完成せしめられる。

斯くの如くして都市歴史の研究に於いて都市の發生を經濟的標識と政治的標識とに從つて時代づける事が出來る。例へば獨逸中世都市の特質が政治的に公選市委員會の成立にあるならばその記錄的正確の許す限りシュタットラートの發生を以つて其の時代を定める事が出來る。又は交易市場の法制に就いても同樣の事が云へる（拙稿『市場と都市發生』參照本誌二十一卷十一號）反對に獨逸都市の發生を經濟的標識に基いて求めるならば市場の成立を以つて其の起源とするは不穩當であるまい、勿論正規な交易經濟組織の成立が一朝にして突如出現せざる樣に正規な恒久的不斷的市場の存在は一朝の出來事ではない、故に市場の存在と云ふ事は必ずしも一定の內容を明示しない、定期的な年市が開かるゝ以前に於いては又不定期的な偶時的な取引が行はれたであらう、この點時間的正確を缺く事甚しいものがある。が一つの公共的制度としての市場は少くとも確定的な存在でなければならぬ、制度としては市場は多分に法制的色彩を有するが其の背後には交易經濟組織の發展が圓熟して來てゐる事が窺はれる、所で所謂市場法論者に對して市場存在のみが都市を發生せしめないとの議論がある、市場は人無き所に起らない、故に市場が都市の核心となるとすれば都市の發生は市場を生み出す力（殊に一定地に市場を出現せしむる力）に遡及しなければならないと說く。しかしかゝる議論は徒らに因果關係を無制限に遡及せしめんとするものであつて事物の發生過程を明確ならしむるよりも寧ろ晦澁ならしむるものである。故に市場は常に一定地に於ける既在の大消費力と特殊供給力の所在に發生するとの見解は如何にも明確であるが之れを都市發生の點に迄及ぼす必要はない。要するに都市發生の經濟的起源に就いては市場成立に求めて差支ない、兩者は經濟的には同似現象である、しかし乍ら都市は空間的現象として他の關係を持つてゐる。この他の關係とは何故に都市が或る一地點に發生したか、何故に在來の（或ひは新設の）二地點が市場を得都市に發展したかと云ふ事である。この事は都市の地域的觀念に關するものであつて以下はこの都市と都市前身の場所的關係を明らかにしてみたい。

（二）

都市は常に人口稠密な、社會に於ける特殊密集の聚落である、この現象は全部の都市に時間的空間的束縛を離れて共通の標識であり所謂數字的統計的又は地理學的標識と稱せらるゝものであるが之れを以つて都市と非都市との區別をつける全部の標準となし得ざる事は明白である、が都市は常に一時代一社會に於ける特に人口の稠密した聚落である事には相違ない、この特色ならびに都市は商工業的利益を中心とすると云ふ經濟上の標識を以つて都市の成立時代に遡つて行くと都市の前身は何ものであつたかを明らかにする事が出來ると思ふ。換言すれば特殊的密集聚落と云ふ事實に數字的有機的重要性を賦與し以つて都市と其の前身とを結合せしむる事が出來ると思ふからである。

都市は其の發生の初期に於いては一社會内の特殊的聚落であつた。この事は時間的普遍性に於いて使用せらる可きものではなく都市は一個の新生的存在として特殊性を示したと云ふ事は都市發生時代にのみ就いて許さる可き言葉である、今日の社會に於いて都市の密集狀態は特殊的であらうが都市の存在は決して特殊的ではない、都市は農村に對して異質的存在ではあるが決して今日社會に於いて特殊の存在ではない、其れが特殊的存在として現はれたのは前都市時代から都市時代に移る瞬時的過程に於いてのみである、即ち都市は或る時代に於いて異質的な且つ一般社會狀態に對して特殊的な存在として發生し來たつた。

こゝに一般社會狀態とは主として農村聚落の基礎に立つ全社會狀態を指すのである、都市發生の初期にあつて、都市は一般農村聚落に對して經濟上聚落上異質的新生的分子を以つて結合する聚落として現はれた。この特殊的存在の對照となる前都市時代の社會に就いては農村に於ける共產制とか大地主の土地兼併とか云ふ問題を論ずる事は都市研究の立場から云へば餘り重要ではない、自由農民奴隸半自由民又は貴族豪族の土地所有的支配等は種々の方面に於いて關係する所はあるが當面の問題として重要性はない、要するに種々の形體に於ける村落と云ふ農業的社會生活の形體を當時の社會形體の一常規として見ればいゝ。是等農村部落に於いて部落民家族内部に工業的勞働の分化はあつても村落内に財の交易は無かつた。村落共有地、共同耕作又は開墾の事實はあつても經濟的交易による社會生活は村落内部には發生しなかつた。この狀態を以つて當時の社會生

活の經濟的形體と見る。原始的な農業經濟生活は孤立的非交通性を持つてゐた工業技術が分岐發達してゐても其れ丈けでは經濟的交通の相互的關係は生れなかつた。この關係が生れるには一部落以上の大きな社會的存在と其れの有する大なる交通性が必要であつた、この交通性が各村落の經濟的孤立を破る力として有力なものとなつた。所で人類は決して村落的生活を以つて全部の社會生活とはしなかつた、こゝに村落相互間の廣い地域に亙つた社會生活があつた、この社會生活の存在が都市發生の形式には必要で單なる村落の個別的な存在丈けでは直接に都市發生の動機を與へる事が出來難い、都市を構成した特殊的聚落はこの個々聚落の相互的交渉を前提として其の基礎の上に生れたのである。之を一地域的に見れば都市は往々一つの村落の漸次的擴大以外のものではない、しかし其は單に地理的有機的關係（之れを專門に研究するのは都市發達の地理的研究である）に過ぎないのでこゝに云ふ經濟上の有機性を物語つてはゐない、經濟的有機性には唯一村落の存在よりは村落集合からなる社會的生活の存在が必要なのである。

が然かも種族又は民族は社會生活の一形體であるが經濟的社會生活は農村聚落以外を出ない、彼等の超部落的社會生活は主として非經濟的性質のものであつた、こゝにこの非經濟的生活を營む重心が現はれて來なければならぬ、元來凡べて社會的生活が營まれるや常にその空間的中心を必要とする、農業村落に於いても經濟的非經濟的生活の社交的中心が存在する、經濟的には直接結合のない一社會にも非經濟的性質にもせよ社會生活的交渉のあるかぎりそれから生ずる中心が生れなければならない。こゝに軍事宗教政治と云ふ諸關係に於ける社會生活の存在に注目す可きである。

都市は各經濟的全一性を有つた村落が在來の廣い社會的生活（非經濟的）の基礎に經濟生活を折り込むに至つて發生したものである。換言すれば從來の廣汎な社會生活の中心點を基礎として經濟的無關係にあつた各部落又は部落の各員が全社會的に經濟關係を結び此の關係の上に經濟生活を維持するに至つて發生した現象である。故に都市の發生と其の前身を今暫く社會的交通の方面から觀察する。

（三）

人類の社會生活には常に空間的中心を持つ、人類は其の生活に於いて常に一定の土地の上に立たざるを得ない。しかも人間が社會的生活を營む以上、この土地に對する關係に於いて常に地理學的に密集的に生活する必要が生ずる。その密集の程度は各個又は集團の生活上の便宜による。が唯完全なる孤立的居住は存在しない、多少遠近の差こそあれ常に集合的生活を營む。この地理的集合と社會生活上の相互關係とは密接な連絡を保つ、社會生活上のある系統は比較的粗なるが故に地理的に密集の要を見ない、又他のものは社會的關係が密なるが故に集合的必要をみる。唯密集粗離は必ずしも各系統の社會生活の重要さを決定すものでない。或る生活がその生活上地理的に他との接觸を必要とするか否かゝ之れを決定するのである。故に最も密集的形體としては家族がある。次いで血族近親があるが此の血族的密集が經濟生活の密集と合したものが氏族的部落である、經濟生活の密集を必要としないで稀薄なる血族的結合、主として戰爭政治的結合に於いて密集したる團體に種族並びにガウ(種族的國家領域)がある。要するに各個人又は團體は各〻その生活上の必要に於いて土地に依據しその社會生活を又土地の廣狹的關係に現はしてゐる。故に又この社會的生活は土地の上に其の中心を示す事となる。村落には村落全體としての中心、鄉には鄉全體としての中心、一國には一國全體としての中心が現はれる。故に又この中心は常に社會生活の諸系統に應じて發生するものである。

斯くの如くして人間は孤々に又は集團的に一定地に定住して基本的(經濟的)生活を營むが彼等の生活は他の方面に於いてはこの定住地域以內に限られない、こゝに甲地と乙地との間に居住せる人間間の交渉に應じて土地の上の交渉關係が生ずる、この相互的交渉關係を持つ地域的の廣さを社會生活圈と云ふ。故に如何なる場合にも都市研究者はこの地域的觀念を忘れてはならぬ、換言すれば社會生活の空間的考察である、之れ故にこゝに聚落の社會學的考察と云ふ事を云へると思ふ。都市、町村、部落或ひは一軒家はいづれも基本的生活の聚落形式であるが同時に社會生活の空間的表現である。

人類の經濟上の基本的聚落を稱して聚落の單位と名づける事が出來る。一社會に於いて規定せられた生活樣式に從つて各個人又は集團が生活しうる基本

的聚落である。故に部落も村落も或ひは山間の一軒家も一社會的生活樣式の内に於いて生活しうる限り聚落の一單位である。大產業主義時代の現在では大都市も亦聚落の單位である。要するに單位聚落の基礎は基本的經濟生活の依つて立つ可き所である。經濟學的に觀察すれば一社會狀態に於ける一定聚落地は其の土地の上に養ひうる丈け多くの人口を收容してゐるのである、是等の人口は其の土地に依繫してのみ(勿論全社會的交通の範圍を以つてゞはあるが)生活する事が出來るのである。

今この一定土地の上に複雜な社會生活が營まれる故に吾人はこの特定地點を基本としてその上に營まれる生活の持つ社會生活圈の大小と社會生活を結びつける因由の複雜性を注意する事が出來る。一單位聚落の上に營まれる生活の社會的交渉の系統的複雜と地域内廣狹を標準として其の聚落に於ける全社會的交通の密度を見出しうる。この交通の密度は内在的と外來的とに分たれる。内在的とは社會生活圈が其の土地以外に及ばぬものを云ひ外來的とは其の土地に營まれる生活の社會的交渉が此の聚落單位を超越して他の聚落單位に對して往來の關係を生じたものである。原始的な農村生活に於いて經濟生活は前者である、經濟的に一村落は單位聚落として何等外界との交渉を必要としなかつた。然るに鄉又は種族的地方或ひは一國地方を構成する社會生活は特殊な中心地を持つてゐた、その中心地は單位聚落として經濟的には内在的交渉をのみ有したが政治宗教又は軍事と云ふ諸種の社會生活の中心上この土地に局限されない廣い生活が營まれた、之れ即ちこの土地に外來的交通を生み出す所以であり、是等中心地はこの點に於いてのみ一般農村聚落と性質を異にするのである。都市の發生に必要なのは此の種の交通即ち外來的交通の存在である。此の點の交渉あるが故に都市は一般村落に普遍的に發生しなかつたのである。社會的交通の中心は必ずしも一ヶ所である事を要しない、元來は社會生活の諸種系統に從つて各自中心地を有す可きであるが文明の發展中前都市時代とも云ふ可き過程には一特定地點が諸種の社會生活の中心を同時に構成する事を普通とする時代があり是等の時代には基本的聚落としてはいづれも農業村落として存在する。最大の社會形體の内部には均等的に農業村落のみが存在する、しかし是等村落中或る特定のもの

が全社會的交通の中心地を兼ねる事になる。之れ即ち一地方の主部政治宗教又は軍事との中心地で所謂前都市時代の都に相當するものである。

しかるに社會的接觸は單純から複雜に進む、一つの因由による社會的接觸は他の關係を再び社會的ならしめる。軍事宗教政治的中心に於いてかゝる性質の社會的接觸は經濟的關係までも再び大なる社會生活圏内に交叉せしめんとする。この現象が地理的に再び表現せられてこゝに都市は發生して來る、經濟生活の複雜化は都市と云ふ聚落に於いて社會的交通の密度を最も高からしめたのである、殊に又都市に於ける經濟的因由による社會的接觸は又新規な非經濟社會的關係を作り出し又は集中する事になつた、然らば都市は全社會生活の中心であると云ふ言葉は過言でないと共に文明史家や都市經營當事者が口にする「都市は文明の中心である」と云ふ誇稱以上に深い根據を持つのである。

茲に於いて吾々は廣い社會生活圏を持つた聚落は廣い社會的生活の中心として存在する事を知つた、この土地は社會的交通の密度大なる點であるが、歴史上の一時代にはこの社會的交通の中には經濟的關係が未だ現はれない時代があつた。

經濟的交通としては各土地は内在的な交通をしか持つでゐなかつた、それも上述した樣に團體的經營の一部分についてゞあつた。然らば何故にかゝる地點換言すれば社會的交通の密度大なる中心地にのみ都市の發生を結びつけるのであるか。この事は一般經濟史上の發展的傾向を得る者の容易に解決しうる所で改めて説くまでも無からう。市場は個々の村落には先づ發生しなかつた、個々の村落個々の經濟主體内に發生した事は流通經濟上には直接意義のない勞働技術上の分化であつた、この技術上の分化は如何に精細を極むるもその儘では何等流通經濟上の組織として關係を持たない、村落又は莊園經濟は依然として一個の自己經濟組織である。然るに是等の組織體の内部にある各個の生活體は直接又は間接に他の部落又は部落民と交通するの機會を有する、之れ即ち政治的宗教的又は軍事的系統を持つた社會生活の一面であり、かゝる中心的接觸は次いで如上の系統以外に於ける交渉を生み出した、かくして生み出された交渉の新系統に經濟的なるものがある、即ち是等社會的中心に於ける全社會的集合に際して財貨の交易が行はれると云ふ新現象である、この現象は或ひは部落總體の形式に於いて或は部

落民個々の資格に於いて爲された、部落民個々の資格に於いて爲さるゝや一部落内に於ける各個の經濟生活は既存した技術上の分化を基礎に著しく複雜多樣性を示して來る。こゝに全社會的中心に於ける交易制度の確立と共に村落内に於いても經濟上の分業が成立をつげるのである。が吾々は未だ其の點迄論及する必要はない、要は全又は多數民の集合する機會は常に新しい系統に於ける關係を生み出すものである事を注意するに足る、この中心に於ける交易が偶發性から正規性をうるに到る過程即ち市場組織の發生は又別の機會に於ける問題である。

この結論に於いて吾々は都市或ひは聚落の社會學的標識に到達した、之れに從へば都市又は各個の聚落は常に地域的に全社會生活との交渉を表現してゐる。或る聚落に於いては何等他との地域的交渉が其の土地の上に營まれない、或る聚落に於いては他との地域的交渉が複雜に營まれる。この後者即ち一定の土地の上に全社會的交通の最も複雜頻繁に營まれる聚落、之れ即ち都市である、故に經濟的標識に從はないで社會學的に見るならば都市は全社會的交渉を其の土地の上に實際に現はす存在である、古代王宮都市は此の例證である。

要するに如何なる時代に於いても全社會を聚落の集合としてみる事が出來る、前都市時代（經濟的標識に從ふ）には農村聚落がこの聚落集團の各單位であつた。この集團には早くから軍事的又は政治的（非常に稀薄な關係であつたが）或ひは宗教的中心を持つたが經濟的中心を缺いた、獨逸中世都市は先づこの聚落集團の經濟的中心として現はれた、中世都市は聚落集團經濟の中心地であつた。

之れを實際に徵してみるならば軍事上の中心は軍事頭目或ひは酋長の居地、諸侯國王の居城がそれである、宗教上の中心は寺院殿堂所在の地である、政治的中心に到つては全種族民の爲めに集合する地點がそれであるが、是等中心は前述した樣に是等の時代にあつては一點に歸する傾向があつた。いづれにしても是等の地點は高度の密度を持つた社會生活の中心地點である、以上を以つて都市研究の序論となし以下かゝる狀態を獨逸に於いて眺めんと欲する。

（四）

ゲルマン民族は西歐羅巴に於いて羅馬文明と接觸するに及んで歷史上に聊か明らかな跡を示すに至つた。故に彼等の原始的生活に關し明確な觀念をうる事

は非常に困難である、が大體に於いて彼等は種族的結合に於いて生活し或ひは數個の種族的集團となつて運動した。經濟的生活に於いては主として農業牧畜に依據する、又各經濟個體の內部に於いて工業技術の發達ある事を全然否定する必要はない。交易は正規に且つ組織的には全く行はれなかつた。偶然的な交換が機會的に行はれたに留まる。ゲルマン民族の聚落狀態殊に都市發生前の狀態を考究するには民族定住と云ふ現象が必要である、所謂放牧的な生活の持續せらるゝ限り都市の發生は望み得ない、がゲルマン民族の農耕生活は五、六千年の古きに及ぶと思はれてゐる、故に羅馬時代に於けるゲルマン民族の生活は主として定住的な農業形式を備へた。彼等の社會的生活は職能的と聚落的の二方面から見る事が出來る、聚落的に見れば社會生活の單位は主として村落又は之れに類似の形式である、各種族の間にあつて聚落形體は必ずしも一樣でなかつた、山間狹隘の地域には牧畜の必要上孤立的聚落が少くなかつた、しかし谿谷平原に於いてはいづれも多く村落的聚落の形式をとつた。この聚落が血族的關係につながり（Sippe, Geschlechtverband）政治宗教上の小團體たると共に又一個の經濟的統制を有する、村落共產制的組織マルクの制度は之れである。勿論この時代にあつても村落並にマルクは共に一定の確定せる領域を有する地域的團體であつた、この聚落的觀察から離れて職能的觀察を下すと事情は必ずしも聚落狀態に一致しない。一種族の占有地域或はその一區分はガウと稱せられる、此の組織は職能的には血族、宗教、政治、又は軍事上の統制である、故に種族の頭梁に國王（大王又は小王）を戴く、之れは軍事的司法的主腦である、この團體は勿論全種族的には地域的ではあるが全地域には經濟的職能を持たない。故に國王又は軍事指揮者も經濟的職能に就いて聚落的に見れば一般普通の村落に定居してゐるのである。種族的地域（Völkerschaft）が一般に軍事的編成上タウゼントシャフテン、タウゼントシャフトがフンデルトシャフテン、フンデルトシャフテンがツェーンシャフテンに分たれてゐたと云ふ主張、そしてフンデルトシャフト並びにツェーンシャフトは同時に地域的團體で且つ經濟的團體（マルクゲノッセンシャフト）であつたとの主張に對してタウゼントシャフテンの存在を否定しフンデルトシャフテンは本來人格的集團で地域的團體でないと反對する者がある。ハインリッヒ・クノオ近著 Allgemeine Wirtschaftsgeschichte

第二卷並びに Alfons Dopsch: Grundlagen der Europäischen Kulturentwicklung. を參照せられたい。當面の問題として此の點に煩はされる所は全くないのである、一村落が直にマルク團體であつたり又は一マルクの內に數個の部落村落が存在してゐたり、或ひは村落又はマルクとフンデルトシャフトとが一致しても、しなくとも吾々は村落の中心地、マルク集合の中心地、フンデントシャフトの中心地を求める事に何等困難を感じない、即ち村落の中心が同時に全部を兼ねるか或ひは軍事的中心としては村落以外の大きな團體の中心、換言すれば一特定村落(軍事上權力者の所在地)がその中心になるかの問題である。而して常に小さい社會生活圈に對して大きい社會生活圈が對立する、家族、祖先祭祀經濟の諸職能は前者に現はれるに對し軍事國政の如きものは後者に現はれて來る。兎に角部落會長(Geschlechthäuptling, Dorfvorsteher)マルク團體代表者(Markvorsteher, Obermärker)マルク敎會(Markkirche)マルク又は部落民の總會(Markgerichte, Märkerdinge, Märkertage, Haingerichte)は諸種の社會生活上の機能、Dingplatz, Malstätte ヶ稱せらるるは其等の空間的中心地であつた。更に其等の中心は軍事的設備として一般部落民の戰時避難所である Pucara(Zufluchtsstätte, Volksburg) と同一地點となる傾向がある。是等のものは當時の社會生活の中心的結節であり、彼等の生活狀態を考ふればかゝる中心點は大體に於いて同一地點に歸するものと思はれる。即ち或る特定地點は村落生活の中心としては村の中心であるが其の地に有力な軍事的政治的宗敎的勢力が存在してゐれば同時に軍事、政治、宗敎的全社會生活の中心地を兼ねるものである。又軍事的統制として König (Rex) Hunne (Centenarius) Zehnter (Decanus) 等の階級別が存在すれば又各々大小の中心が統卒する社會圈の大小に應じて分立してゐたものと想像する事が出來る、軍事的政治的宗敎的には廣い社會圈內の統制を有し其の中心地點を有したが經濟的職能に於いては果して如何であつたか。是等の地點殊に村落の中心地の如き狹い社會生活圈の中心地が同時に經濟的交通の中心點であつたか否かは明白でない、勿論共同經營にある共有地又は共同耕作の時日などが是等の中心地に於ける公共的集會で決定された事は事實であらうが其れ以上に經濟的交易が行はれたと云ふ事に對しては否定的ならざるを得ない。マルク或ひは一村落は其の內部に於いて此の時代に經濟的交通が行はれるには餘り小規模な又變化

を持たない同質的存在である。が論者の或者例へば「ゲルマン民族の商業と交通」の著者フォルクマンの如きはかゝるマルク集會の地點が同時に交易の中心ともなつた樣に解釋してゐる。

常に社會生活圏の大なる特殊中心地には其の土地聚落民とは聚落的に異質な住民の去來する特色がある、村落又はマルクの政治的宗教的集會に於いて、この中心地點に特別の治安維持財産保護往還の安全が一時的に確保せらるゝ風習がある故にマルク以外の外國人も此の機會に於いて商業的目的の爲め入り込む事は可能である。がこの性質に於ける交換取引發生、聚落的に異住民間に行はれる可能性と聚落内部の同住民間に取引が行はれたと云ふ事とは同一ではない、吾々が交換取引の最初として考へるのは前者であつて後者に就いては經濟的交易が發生し得なかつたと考へるのである。故に羅馬邊境に於けるゲルマン民族の聚落中心地に是等の民族集會の日時を機會として羅馬ガリアの商人が入込んだ事は想像しうるが聚落内部に於いて同住民間に交換が行はれた事は考へ得ないのである。又マルク集會の時はマルク會員相互間に交易が行はれたと云ふ問題はマルク團體の大きさに就いての問題と密接な連絡を有する、マルク團體を以つて可なり多數の村落聚落を包含してゐる場合とマルクが唯一の村落聚落から成立してゐる場合に於いては事情は可なり異つて來る、換言すれば前者の場合には村落即ち個々聚落の中心は直にマルクの中心ではない、從つてマルクの中心地は聚落的にみれば可なり異質的な住民を集める事になり交易發生の可能性がある。この問題はマルクの大小についての問題以外に解決する事が出來る、マルクが一農村聚落から成立してゐても、マルク團體が唯一の社會的存在ではない、故に再三反復したるが如く上位社會的生活の中心が形成されこの中心に於いて經濟上の交易が行はれうる可能性がある、要するに團體の名稱は如何あらうとも社會的形體とその交通にこの大小の差別のある事が根本的である。

ゲルマン民族の一族アレマンネン族にあつては一族の各軍事的區分は全體がいくつかのタンゼントシャフト(ガウ)に岐れ、このタウゼントシャフトが又四、五のフンデルトシャフトに分れてゐた、故にタウゼントシャフトとは純然たる軍事的政治的統制を持つてゐるに過ぎなかつた、この軍事的政治的首長は國王、グラーフ

或ひはヘルツォークと稱せらる。タウゼントシャフトは血族的關係に於いてHaupt-geschlechtから成立しプンデルトシャフトはUntergeschlechtから成立する。故にタウゼントシャフトは一定の境域を有するが一個の特殊的單位聚落とは爲り難い、聚落單位は常に村落である、聚落單位と領域單位とは區別されねばならぬ。唯この軍事或ひは宗教的必要の爲めにタウゼントシャフトは其の境域内の一地點に社會的中心を持つ、之れは聚落としては當然一般農村其他と異る所なきも貴族又はヘルツォーク、要するにタウゼントシャフトの首長の居地として特殊的な意義を持つ、この地に於ける社會的交通こそ聚落單位的に見て異質的なるものを集め來る發展的密度を有してゐる。このタウゼントシャフトの上に一つのシュタムの領土がある、シュタムの全支配者は又こゝに軍事的政治的中心を自己の居地に有するであらう。之れ國王の館其他として現はれる。

以上ゲルマン民族の聚落單位とこの上に構成される社會的形體を簡單に觀察した、聚落單位は常に農村村落である、然しこの聚落形式も決して一樣でない、ゲルマン民族各種族の間に聚落人口密度の相違から諸種の形式が生れてゐる事マイッェンの研究に見る通りである。が要するに當時にあつて一村落又は村落的存在を以つて聚落單位とみる、之は同時に經濟生活に於ける基本單位である。この社會生活の上に血族政治軍事的社會生活の形體として種族團體がある、是等の團體は皆社會的生活の中心地を有する、こゝに於いてある聚落單位は唯單に農村的存在としてゞなく其れ以上の意義即ち政治軍事又は宗教上の中心としての意義を有して來る、その範圍に於いて又其の土地は聚落單位からみて異質的な社會交通をうけて、社會的交通の密度の最も發展した地點を形成する。それ若しこの中心點を目指して外國人例へば羅馬邊境に於けるゲルマン種族の中心地に羅馬商人の集るが如き事あらば其の地點の交通の密度は更に高まつたと云ふ可きである。

以上が都市發生以前に於けるゲルマン民族の社會的生活の中心についての略圖である、以下如何に是等の土地が都市發生に重要であるかを觀察する。

（五）

あらゆる社會生活の全般を通じて吾々は其の比較的中心を空間的に定める事が出來る、ゲルマン民族諸族の間で一種族が國家社會的統制を持つてゐたとすれ

ば彼等の中に其の國家的生活の中心として全地域の重心を認める、是れ即民族大移動前後に於いてガウ又はフォルクスグマインデの首都(vici)と稱せらるゝものである、而して此の地點こそ全地域内に於いて前述せる如く最も交通の密度の大なる所であり、この中心點に於いては既に多少の經濟的交通が成立してゐた事を考へうるのである。故に單なる村落又は小規模な社會生活圏内の小中心點に經濟的交通は先づ發生しなかつた可なり複雜な地方性を持つた廣大なる面積についての中心にのみこの發生を認める。斯くして種族領域の中心地は行政軍事宗教次いで經濟上の中心となりつゝあつた。若しこの地を中心として經濟的交易が規則的に行はれるならば、換言すれば正規の市場が成立するならば既に都市發生と云ふ事實を認めうるものである、然るに第三世紀から第五世紀に於ける民族大移動の前後にはなほ純ゲルマン民族の間にはかくの如き正規な經濟上の交通は發生してゐなかつた樣である、是等中心地に於ける市場は全地域民の來集する特別の機會に於いて附隨的に行はれるか又は交易を正規とするに當つても最初は極めて間歇的な市場成立を認めたに過ぎぬ。が兎に角かゝる社會的中心は一國家社會の對外的關係の中心となる事は昔も今も變りがない。ガリア地方に侵入し之れを征服した羅馬人が占領地支配を行ふにあたつて利用したのはこの關係である、即ち彼等は一種族社會に於ける有力者を皆この種族領域の中心地に集合居住せしめ之に於いて全地域を支配する權能を與へた、更にこの中心地は斯くの如くして羅馬的意義に於ける市制を得た、civitas とは之である。僧正教會も亦この中心地に置かれた、數度の宗教會議に於いて單なる村落に僧正教會を置く事を禁ぜられた。この事情からして所謂僧正都市、換言すれば都市の發生は僧正教會の存在に負ふとの說は全然意義を持たぬ、かゝる教會は既に比較的密集聚落の存在してゐた所に置かれたのである。かゝる種族社會の領域的中心地は又教會的方面にも全領域個々の村落教會を支配監督する長老資格者の任住するに價してゐたのである。後年ガリア地方に於ける羅馬市制はゲルマン民族の來住と共に漸次變化し衰退して行つた。ライン地方に於いても羅馬支配は同樣な過程をとつた、種族的國家社會の首都として vici は市制を得ては所謂羅馬都市となつた、是等は其の發生的意義に於いて羅馬軍營城塞の所在地から發達した都市 (Lager-

stadt）とは多少趣を異にするのである。

茲に於いて社交的中心地の發生に關して尙ほ一言す可き事がある。前述した所は經濟的交通の中心地としての都市は、非經濟的關係を中心とした社會的交通の集合する所に先づ發生したと說いて來た、種族的國家社會の中心點は或る時代に於いては經濟的交通の中心であつたらうが其の以前に於いては軍事政治上の中心地に過ぎなかつた。が此の發展傾向は云はゞ單純型である、他に何等外部からの交涉のない型體としての考察である。が外部からの交涉が加はるとこの社會的交通の中心に異動又は變化を來して來る、他國又は他種族或ひは民族と境を接する場合或ひは自國領域が擴張したりするとこの變化が現はれる、吾々は之れを簡單に邊境交通の中心が出來たり或ひは一國の首都に對して地方的都會の出來たりする實際について見る事が出來よう。斯くの如くして是等第二次的の中心は主として交通の發展商業の通路の重心等を原因として成立したものであり、此の意味に於いて第一次のものゝ如く非經濟的性質から出發した事を明確にしないのである、この發達の階程に達するや都市の發生は非經濟的中心と云ふが如き前提なくして直に經濟的であり商業發展の結果と云ふをさまたげない性質のものとある。

之れを獨逸に見ればゲルマン邊境防備として有名な Limes に沿ふて軍事的城砦と共にこの地にあつて邊境取引に從事する者を包含した聚落が盛に發生した、必ずしも常に敵視的でないゲルマン部落民はこの地點に集つて交易を開始した。是等の土地で羅馬駐屯軍の常久的舍營となつたものに Strassburg, Mainz, Xanten 等がある。Köln, Trier, Neuss 等又軍事的中心と共に經濟的關係の庶民の聚落を許す地ともなつた。其他羅馬支配下の邊境には多くの軍事上の城砦があつた、是等の城砦は同時に戰時に於ける地方部落民の遁入避難する地で又多くの交通路の交叉點には必ず設けられ又同所或ひは附近に經濟的交易の市場を有してゐた。

要するに羅馬征服の時に於いて新しく發生した新聚落を除いて考ふれば羅馬都市乃至舊都市の前身はいづれも種族的國家社會の首都であつた、第五世紀後半にラベンナの一地理學者が編纂した無數の civitates 中大部分は種族的中心首都として既に都會的存在を持つたものであつた。ライン地方にあつては、Mainz, Bingen,

Boppard, Oberwesel, Koblenz, Andernach, Remagen, Bonn, Köln, Worringen, Serm (bei Düsseldorf), Neuss, Drüpt, Aschburgium (Burgfeld bei Asberg), Bisten, Xanten, Ninewegen, Analburg (bei Cleve) Evitano, Fletione, Matellionem でありルートヴーゲン地方では Worms, Altrip, Speyer, Pforzheim, Strassburg, Breisach, Basel, August, Kaisten, Etzgen (Cassanagita) Zurgach (Wrzach) Konstanz, Regium (Zug ?) Bodungo, Arbon, Bregenz. 更に Ehl, Kork ö. Strasburg (Chorust), Zabern, Frincina, Aaon, Lagniirion, Brara, Albis (bei Zürich), Zürich, Dübendorf, Crino, Othmarsheim, Cariolon, Vindonissa (Theodoricopolis), Vermeraton. 他の系統には更に Augsburg, Reissburg (bei Günzburg a. d. Donan, oder R. bei Canhingen), Baden, Theuningen (OA—Tettnang, oder Düre Berge am Neckar bei Tübingen), Bergen (bei Frakfurt), Asberg (Ascis) i. Württemberg (OA-Ludwigsburg), Aschaffenburg, Würzburg, Salz (Solist) bei Neustadt oder (Hohen-) zollern ? モーゼル河畔では Koblenz, Karden, Bernkastel, Neumagen, Trier 等である。

之れに對してゲルマン内地に於ける狀態も決して未開のものではなかつたらしい、ケーザル、タシトゥスの記錄にはゲルマン諸族ウビエル、バターベン、スッエーベン、マルコマンネン、クアーデン族の聚落には既に Oppida が存在してゐたと云はれるがこの防壁を廻ぐらした地點は常住の聚落地であるよりは寧ろ戰時の避難所であつた。タシトゥスは更に vici について記載してゐるが之は今日の村落（ドルフ）ではなくて明らかにガウの内部に於ける比較的大聚落で裁判が行はれ種族團體の首都であり元來は Völkerschaftsversammlung (Concilium) の上で自から公共的の政を行つた土地である。又上記の避難所として各のガウに一ヶ所のブルク（城塞）がある、この城塞は元來戰時の必要であるが漸次軍事的階級の常住地ともなつた。又時代の經過と共に軍事的權力者が文治的職能を合一し民主的な行政機關は漸次貴族的專制獨占的となつて來る、之れに附隨して從來全種族境域に對して單なる軍事、行政上の公共的中心地であつた vici は聚落形體のこの職能的差異に基いて漸次一般の村落聚落とは全部形體を異にしたものとなつた、こゝに形體上には特殊的密集の聚落として經濟的機能に於いては農村聚落と異つた社會的關係に立つ聚落が發生しはじめて來た。この發達の階段に於いて吾々は都市の發生を求め樣とするのである。

一方村落内部に於いても從來の技術的分勞は經濟的分業に變化しようとして

ゐる。各聚落間の外延的交通は各聚落の内包的方面にも影響を與へる。が工業が農業から分離し獨立の經濟單位を形成するに至つた經過は村落自身に於けるよりも都市、正確に云へば市場地たる可き地點に於いてゞあつた。如何にして恒久的な市場が發生し如何にして市場市民が形成せられたかは次の機會に讓る、こゝには都市の聚落としての性質を社會學的に考究しその基礎に於いて獨逸都市研究に近づく可きを考究したるに留まる。經濟的所産としては都市は交易經濟組織成立以後のものである、しかし前に述べた樣に一定聚落内に於いて營まれる生活の社會生活圏の大小に從つて都市を社會學的に云ふならば都市は前交易經濟時代にも存在する。この前交易經濟時代の社會學的な、例へば都と交易經濟時代の都市とを結びつける事がこの論文の目的であつた。獨逸都市の歴史的發展の詳細なる記述は他の機會にまつ。（昭和三年二月二十日）

一八三〇年代のアメリカに於ける全國勞働組合の活動

園　乾　治

一　全國諸業勞働組合

全國諸業勞働組合は一八三〇年代に於ける勞働組合運動の發達の第三階梯に屬する。第一に地方勞働組合、第二に都市に於ける組合本部の成立第三に此全國勞働組合の順序である。而して之は一八三四年八月成立し、一八三七年五月に消滅して終つた。其成立せる原因は勞働組合に加入せる勞働者數の增加に在る。一八三四年に於けるニュー・ヨーク、フィラデルフィア、ボストン、バルティモアー、ワシントン、ニューワーク等に於ける組合勞働者は總數二萬六千に過ぎなかつたが、一八三六年に於ける其總數は三十萬を超へて居る。同一の職業に參加せる者が組合を組織し、多數の同業組合は更に一の組合を組織し、之を全國に普及すれば、富